

不登校の定義

「何らかの心理的・情緒的・身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しない、あるいはしたくても出来ない状況にあること」(文科省の定義)

不登校のタイプ分け(秋田県総合教育センターの分類)

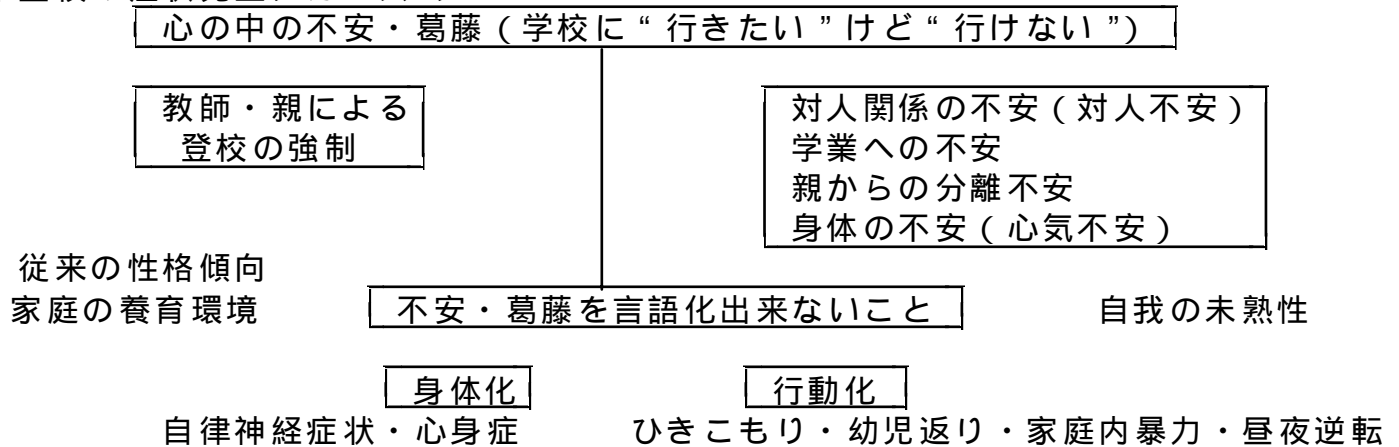
分類名	特徴	対応のポイント
分離不安型	小学校低学年に多い。母親から離れる事に強い不安があり、それによって母親も不安定になり易い。双方の不安感が高まり、情緒的混乱が深まって動けなくなる赤ちゃん返り等の退行現象が見られるようになる	母親と一緒に登校等柔軟に対応。無理に引き離そうとせず、徐々に母親との距離をとる
良い子息切れ型	親や教師の期待に応えようと頑張ってきた子供が、学業や友人関係、学校生活のペースについていけなくなり、不安・葛藤・挫折感を深くして登校できなくなる休むことへの罪悪感が強く、家に閉じこもりがち。	今までの頑張り認め。励まし・登校刺激を避け、無理のない新しい目標と一緒に考える
甘え依存型	幼少時から甘やかされて育ち、内面的に未熟で依存心が強く耐性が身に付いていない。困難を克服する態度努力がなく、ささいなキッカケで登校できなくなる。他者との強調・自己主張が苦手、プライドが高い。	集団での不適応・トラブルに、調整を図る。じっくり成長を援助し、保護者への助言を行う
無気力型	行動は安易な方向に流される。投げやり。身体症状は少なく、強く誘うと登校するが続かない。学習意欲に乏しく、将来のことも考えようとせず、欠席を重ねる家では好きな事に熱中、日中にも外出することがある	周囲が登校させることに躊躇していると、再登校が困難になる。状態に応じて登校を促す
学校生活に起因する型	いやがらせをする子どもの存在や教師との人間関係等、明らかにそれと理解できる学校生活上の原因から登校できなくなる。トラブルを解決できず、積み重なったストレスにより体調を崩し、身体症状を訴える	学校の対応が解決の鍵。事情を調べ解決を図る。子供の訴えを「ワガママ」「甘え」と責めない
神経症等を伴う型	対人恐怖、不潔恐怖、自己臭等の神経症的な症状を訴え登校できなくなる。精神病・摂食障害・自傷行為等を伴うこともある。大人には安心できるが、同世代の子供に恐怖感がある。几帳面、ささいなことにこだわる	子供の不安感・葛藤をやわらげる対応。病気が疑われる場合、専門機関と連携する
発達・学力遅滞を伴う型	軽度の知的遅れ、発達の全般的な遅れやバランスの悪さ等が原因で、集団適応や学習が困難になり、登校できなくなる。自分のペースに合う活動には喜んで参加する。休み始めてからも落ち込まず、比較的元気。	状態や程度により個別指導等の配慮をする。子供の興味に合わせた、楽しい活動を工夫する。

不登校の考え方(原因・要因・背景)

定説はナイ。理論・学派の数(研究者の数)だけ、解釈がある(?)。

- ex.) 「不登校の子供は学校を嫌っているのではなく、人間関係につまずいている」
「人との関わり方を身に付ける為の援助をしてやればいい」
「不登校は自立の時に表れる、心の病気」 「ゆっくり休ませ、見守ればよい」
「不登校の子供は、過去へのこだわり、未来への不安の間で、『今』を失っている」
「親に問題がある。逃避的で弱い父と支配的な強い母。その為、年齢相応に必要な社会的スキルが身に付いていない」 「家庭の人間関係を改善すればいい」
「学校に問題がある。受験に方向付けられ、形式的で味気ない授業によってストレスが作られる」 「学校での望ましい社会的雰囲気形成すればいい」
「子供の性格に問題がある。脆弱で傷つきやすい」 「強い自我の育成が必要」

不登校の症状発生メカニズム



不登校の臨床経過

- 第1期・・・心気症的時期 朝方に食欲不振・頭痛・腹痛・嘔吐・めまい・発熱など、心気症的訴えをして登校を拒む。医学的には重大な所見がなく、症状も昼頃には治まる。
- 第2期・・・攻撃的時期 親は子供が病気でないことに気付き、「ずる休み」を疑って、子供を責める、登校を強制する。このような親に子は反抗し、暴言・暴力を示す。
- 第3期・・・自閉的時期 欠席が長期化するにつれ、教師・友人に会おうとせず、自宅に閉じこもる。多くの場合、昼に寝て夜に起きている「昼夜逆転」の生活を送る。

不登校児の「不安」

- ・対人不安（みんなに笑われたら、先生に叱られたらどうしよう）
- ・見捨てられ不安（友達に嫌われたら、皆から無視されたらどうしよう）
- ・心気不安（学校でお腹が痛くなったら、トイレに行きたくなくなったらどうしよう）
- ・学業不安（勉強についていけなくなったら、どうしよう）
- ・完全癇不安（毎日1校時から最後まで授業に出られなかったらどうしよう）
- ・分離不安（お母さんから急に離されたらどうしよう）

不登校児に対して担任教師が持つ8つの治療的因子

- 1)教師から肯定的に見られていると感じる因子（はげます、ほめるなど）
- 2)教師から見離されていない、かまってもらえているという因子（声をかけるなど）
- 3)教師や友人に認められていると感じる因子（発表の機会を多くするなど）
- 4)自分の気持ちが教師に分かってもらえていると感じる因子（話を聞く、話し合うなど）
- 5)集団に受け入れられていると感じる因子（学級の雰囲気作りなど）
- 6)自分が役に立っていると感じる因子（係の仕事を持たせるなど）
- 7)集団に所属していると感じる因子（クラブ活動、仲間作りなど）

参考文献

- ・秋田県総合教育センター特殊教育・相談研修部 『研究紀要～タイプや状態に応じた不登校児童生徒への対応』 1998
- ・月刊生徒指導編集部 編 『クラス担任の登校拒否入門』 学事出版 1989
- ・東山紘久 『母親と教師がなおす登校拒否』 創元社 1984
- ・星野仁彦 『病める現代社会・学校とこどもの心』 平成10年度県南地区精神保健福祉研修会資料 1998
- ・加藤義明・中里至正 編 『入門青年心理学』 八千代出版 1989
- ・國分康孝・國分久子 監 『育てるカウンセリングによる教室課題対応全書6～不登校』 図書文化 2003
- ・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編 『精神保健学』 へるす出版 1998